PARASITECTURE 自由な街の風景を目指して

都市は体内である。道路や川は血管、建物は臓器、人間の活動は赤血球や白血球のような栄養素の運搬や体内環境維持装置のような役割を持つ。都市に寄生する建築を提案する。

街は隙間だらけ

私達は街を自由に使えていない

市街問題

街で居心地良く過ごすには飲食、娯楽、運動など全てにおいて金銭のやり取りを通じて時間と場所を分け与えてもらわないといけない。

日本の建築は「建物機械」と「その空間にいてもよい人間の種類」を厳密に対応させ過ぎた、投棄や放置型、病院は目的に対して過ぎなく対応するための都市機能として適化しきったせいで、今や誰もが自由に振る舞ってよい空間気は はほとどない。公園でも昼休憩は、飲食禁止などの看板も見かける。

そういった都々な禁止によって自々禁止事項を課すことに違和感を覚えなくなり、受動的な消費に依存した生活を従順に送っている。されるがままの生活から自ら空力目十能動的な生産へと変わる必要がある。

↓

受け容れることによってできる街の風景

街段に腰を下ろして休憩することや歩道の端に植木鉢を置いて世話をすること、黄い江白宮の前に水を撒くこと、歩道の手摺りを物干し代わりに使うことなど、許可も禁止もされていない行為でも構え、眼収されずに自然に続いている行為がある。そういった行為がもっと街中で起こって欲しい。

人々が望け容れうることで起めて自由な行為が起きる風景が生まれ豊かになる。街の風景とは人々の活動がありてできるものであり、機能的・合理的になり過ぎた現代にこそ再度考える必要がある。

↓

民間ちの不質性が意見に応じた結果、現周や禁止が温れた社会になった、例えば公園や小麦沿河間で、民間の気想が投棄に対する、投棄は それの解決策として「禁止」という形で対応する。「禁止」は最終手段で指定時間帯での許可など段階を踏んでいって解決することができたかもしれない。民間と民間、民間と投棄の対応が上手くできていないからそういったことが起こる。誰もが街を自由に思いたいはずなのにそれができないように自々で首を絞めてしまっている。人々が受け容れ合うことで都市はもっと自由な空間となり、私的で自由な行動で溢れ、街の風景となる。

建築問題

従来の建築は施工完了時が最良の状態で、一度建てられたらそれ以降大幅に更新されることはなく、資産の一途を辿る。また敷地という領域を枠組みが設定され周囲の土地から敷地をという特別な場所が分断される。必ず完璧を要求にうまく対応できない、周囲から分断された孤独な物体がそこに存在している。

新興住宅地や土地開発による私道が昔ろしていた地域が形を変えてしまうことは、思い出や在こと情も取られることである。

均質に調整された空間を機能的・合理的に詰い取る、近代建築の典型的な形式の消失が求められる。

↓

建築に生命を創出する

生命は絶えることなく動的な釣り合いを保ち続けている。建築も組織はしているがそれらがもたらしている代償が大きすぎる。

自然地形は、様々な方向に様々な相互を持って居し、人々を様々な規模の場所のままより を作り出している。多様な場所の条件にそれぞれ適合する種の植物がそこに芽ぶくことになる。そうした植物が生み出す場所に古民間家を建設す新興住宅地の建築も同時に提供される。自然地形は結果としてある生態系を育むというはたらきを持つことになる。

都市空間も生命的に見えと複雑で、私道がもっと自由に介在できる余白があるのではないか。

↓

新築で建物を建てるのではなく既存の建物やその隙間に焦点を当て、そこでできる活動を見つける必要がある。一本の樹木には多種多様な生物が生息する環境がある。複雑化された都市にも私道が自由に使える空間は無数にあり、そこで各々が私的で自由な行為をして欲しい。生物多種性から建物のあり方、人間の活動について考え、社会に反映していくことは可能である。

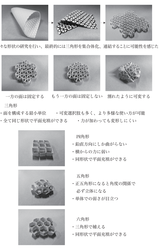
人々が街中を私的で自由に使うための補助装置的なものが必要である。「補助的な役割」「人々の相互受容」「生命の創出」という三つの要素から私は「仮設性」「可変性」「開放性」という言葉に辿り着いた。

仮設性は、一時的に特定の場所を有れた、周辺の環境や需要に応じて撤去、移動できるという性質である。敷地を決めるという、基本的な建築特性が消失する。規準最小規模になることで人々人々が繋がりやすくなる。

可変性は、仮設性と近くて、周辺の環境や需要に応じて自由に変形できるという性質である。抗わず、受け流すことで非親密的に自由な空間を生み出せる。開放性は、自分達だけで自由に使う空間ではなく、周辺の人々も巻き込んだ中に重要な性質である。

「その空間で人が何をしているのか、分かればイメ豆なくて、分からなければ人は不安になる。その結果、通過しうり形で終わる。さらにならないにも未遂様人の活動が周囲に開かれていくと必要がある。周囲の人々も巻き込んだ行為に遭が合い、対話できるのではないか。

「仮設性」「可変性」「開放性」を少んだ建築を考える。



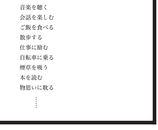
建築が働き、人も働く

アーキグラムのインスタント・シティや黒川紀章の中銀カプセルタワービル、バックミンスター・フラーのダイマクション・ハウス、伊東豊雄の東京遊牧少女の設と、軽く、流動的な構想や構造が概念から、社会の変化速度が加速していく中で、それに対応する予段の一つである。

ただ流動的なのは建築であって人ではなく、しかも建築を動かしたり建て替えたりする事は容易ではない。建築と人が同時に容易に動く事が出来れば社会の変化に流動的に対応できるようになると考えている。

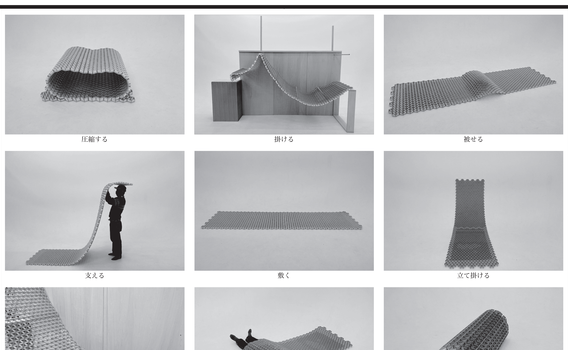
意図していなかった使い方で空間が使われる時、その空間の魅力が最大限に発揮されると考えている。現代建築が意図した通りに計画的に作り、それが破綻する時、時間と空間の両方が崩壊化してくる。「人々が受け容れ合う」ことで自然発生的に自由な行動が生まれる（階段に座ることは意図されていない）。「生命の創出」についても同じで一本の樹木で育まれる多様な生態系はその樹木が意図したものではない。その樹木という空間が結果として生態系を育むための場所になっただけである。

既存の都市空間に PARASITECTURE が一時的に寄生し、人々が営みを育み街の風景となる。

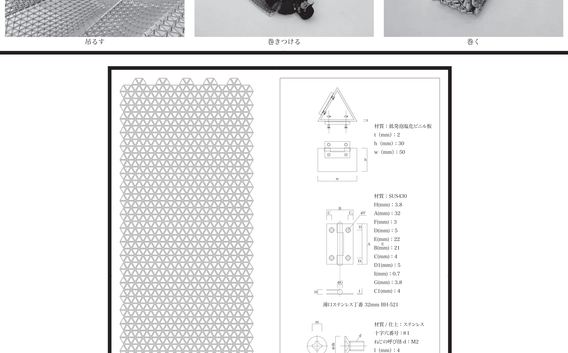


2376 個からなる底の三角四角が九治方空間の骨表を行った。三段ミいう規模でどのような空間が生まれるのか。「PARASITECTURE 本体が持つ基本的動作」「人間の基本的動作」「日常的な活動」の三要素を掛け合わせる事で建築形態の動きと人間形態の動きが作用し、可視化できると考えた。

PARASITECTURE の動作		人間の動作		日常的な活動
圧縮する		歩く		音楽を聴く
掛ける		くぐる		会話を楽しむ
被せる		触る		ご飯を食べる
支える	×	座る	×	散歩する
敷く		走る		仕事に励む
吊るす		寝る		自転車に乗る
張る		乗る		傍草を吸う
巻きつける		見る		本を読む
巻く		もたれる		物思いに耽る
⋮		⋮		⋮



圧縮する　掛ける　被せる

支える　敷く　立て掛ける

吊るす　巻きつける　巻く